

G.R. 白雲郷

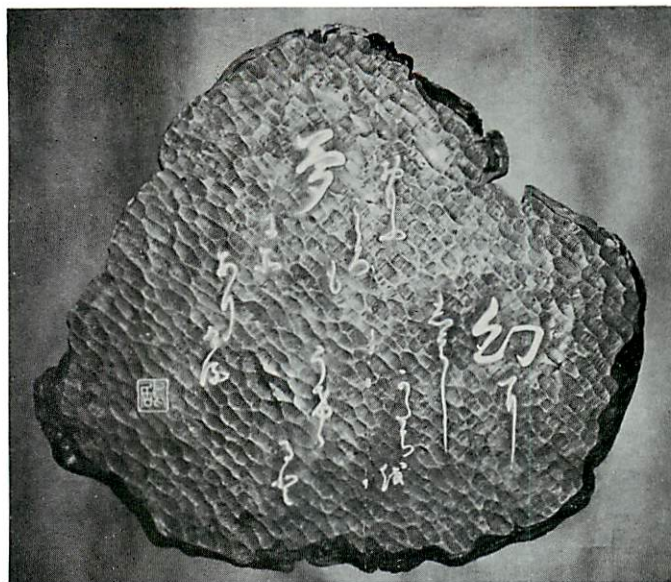
とりぬ



15

昭和45年7月1日





幻にしはしかたちをうけけると
おもうこころも夢にぞありける

この額をアトリエの入口にか、げて已に三十余年 白髪
をいただいて過去を顧^{かへり}みる時 是「一瞬の夢」余生また「一
瞬の幻」 永遠の生命を願うての仏彫も、凡夫の悲しさ、
遂には無 脳裏に浮ぶは只「日暮れて道遠し」の感のみ。

目 次

表 紙	沢田政広先生 観音画
○印度附近の旅路（其の五）	1 頁
○白雲山境内の松井大将の碑と興亜観音	4 頁
○西 遊 記（其の十）	7 頁
○大観音上棟式の模様	10 頁
○壺万体観世音ご奉納者芳名録	13 頁
○壺万体申込用紙	17 頁
○鳥居観音の行事その他	18 頁



印度附近の旅路

(其の五) 桐江

マツウラ博物館

十一月六日、アグラで名高いマツウラ博物館を見物しました。この博物館には、出土した仏像が実に沢山陳列されていて大変参考になりました。

印度の仏像分布は、印度の南方地区と北部（マツウラ仏）地区とアフガニスタン方面のガンダーラの三種類に大別されます。

マツウラの仏像は、バラモン教の神話によってつくられた神像が基となっているので、手や顔が沢山ついていたり、又やくだう的でポリュウムの強いのが特長でありまして、日本の仏像や仏画には此の印度（マツウラ）の形をしたものが沢山見受けられて勉強になりました。たとえば日本の吉祥天や、弁才天は、印度ではバラモンの神の妃で、幸運と、美と、学問の神として崇拜されております。

ジャイプールの王家のホテル

午後、飛行機で西方一時間位のジャイプールに飛びランバーシャパレスホテル（王家の家）に宿りました。此のホテル王宮は実に美しく宏大なもので、食堂も昔のままの壮麗さで、舞台では印度独特の音楽をかなでております。

楽器は大きなかんびょうの中をくりぬいたものを取りついたり又山羊皮をそのままの形で、ふいごにしたような、すべて原始的な珍らしいものばかりで印度独特の音色は人の心をゆさぶるような哀調で、昔王様が多くの家臣や美女にかこまれて楽しんだであろう往時をしのばせました。

ピンクシテイ（ジャイプール）

翌七日、ジャイプール市内見物をしました。

人口は五十万位ですが、ピンクシテイといわれるだけあって町並も服装も赤色が多く、是が南国の強い太陽に映えて、明るく目がさめるようなロマンチックな町でした。

印度の人種は数十を越える程ですが、女はサリを着て顔をおおっているものが多く、又男はターバンを頭

に巻いている者が多く、人種により皆違っているとの事ですが私等には皆同じに見えて区別し難いのです。

風の宮殿（ハマナハル）

町の中央に風の宮殿という七階の建物で、その南面は蜂の巣のような沢山の窓がありますが、北すなわち裏側は皆涼み台（バルコニー）になっていて強い太陽をさけたり涼風を通すように出来ております。

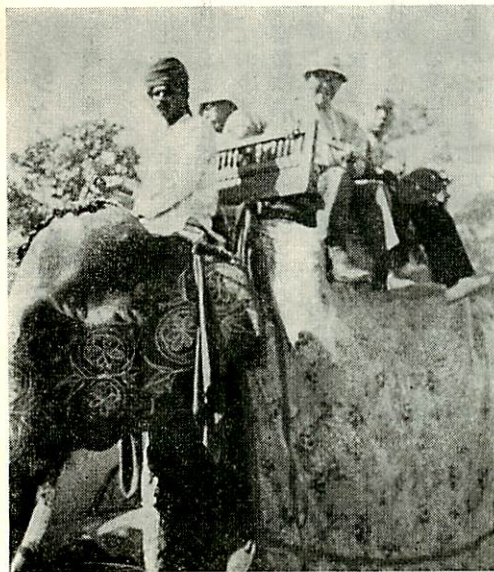
町造りは古代そのままの店造りが並び、露店等も皆珍らしいものばかりで特に人なつっこいよい感じでした。併し此所には日本人が多く来ないと見えて周囲に人だかりがして見物に来た吾々が見せものになってしまった様でした。

アンバー城

アンバー城はジャイプールから十二キロ南方山頂にあります。山麓につくと、数頭の象が吾々を待つております。その象たるや、からだ中に極彩色で色々の絵がかいてあり、その上に布や鈴のついたふさをかけて満艦飾をしております。此の象には四人乗れる様な座席がありまして、大きくゆられながら山道を登るのですが、象の脇に印度人が、小さな胡弓をかきならしな

←アンバー城の象乗り

胡弓をかなでながら案内する印度人



がらついて来ますが、その哀調ゆたかな胡弓の音を聞きながら、象にゆられて登ると、何ともいえぬ桃源郷に引き込まれます。

カリリーの女神

アンバー城の中に、カリリーの女神を祭った神殿があります。此の神殿に入る時は皮製品は一切持ち込む事は許されません。カメラ、ハンドバックは勿論バンド迄取り上げられて、ずぼんをおさえながら見物するのです。神殿に入る通路には銀製で美しいデザインの手が三カ所もあり目を引きまます。神殿にはカリリーの女神の神像や絵が沢山あるが、真黒で恐ろしい顔をして男の首を沢山首かざりにして、夫のシバの神を足下でふんまえて居るのや、美しい顔をしていながら、男の腹を切りさいていたり、虎に乗って男を虐待しているような残酷を極めた、実に恐ろしい神殿で、今の日本の女性上位も此処迄には程遠い事です。

豪華なアンバー城

男がふるえあがる様な此の神殿を出てアンバー城に登るのです。この城を造ったラジャスタン王は、ヒンズー教徒ですが回教徒の女と結婚して、神殿もヒンズー

ーと回教を合せた建築様式であるため、回教徒に破壊されず完全に保存されております。

広間にある百数十本の柱は全部デザインが違っており柱の見本市のようです。五百余の婦人室があります。第一から第十二婦人迄の室はステンドグラスや大理石の透し彫でかこまれ、天井のドームは蜂の巣のようでは是に鏡や寶石をちりばめ、ステンドグラスを通して光で五色に反射し実に美しいのです。外出の許されぬ婦人等は、外景を見るのぞき窓があるのも印度らしいです。窓から見ると湖水や亀甲形の沢山の花壇や、周囲の山頂には堅固な要塞がめぐらしてあります。

可愛い小女

豪壮なシチパンス博物館を参観した時、十才位の印度人特有の大きな目の可愛い少女が私等について歩き写真のモデルになつてくれて旅情をなぐさめてくれました



絞首刑にされた

松井大将遺墨の碑

記念碑建立の由来

大東亜戦^{行な}闘の頃、時の名栗村軍人分会長 故 吉田喜一郎君、その他役員一同が白雲山境内に山桜等を奉納植樹して下され、その記念碑を建立するにあたり、



名栗村軍人分会で建てた松井大将遺墨の碑

往時上海方面の最高指揮官であられた松井大将の書かれた宣揚皇道の字が大きな石に彫まれて、仁王門の前に建ててあります。

大将ゆかりの人の名栗訪問

敗戦におびえた日本は、軍事に関する証拠物件等は全部焼き捨てて消滅したり、忠魂碑等も倒したものです。私は「宣揚皇道」の記念碑は、そのまま残しておきました。

ところが終戦後十年位もたった頃でしようか、松井大将ゆかりのお方が名栗に來られて、鳥居観音奥本堂の須弥壇の上に一枚の名刺を置いて行かれました。

その名刺には「松井閣下の遺墨の碑を、よくそのまま倒さずに置いて頂いたことを、深く感謝致します」ということが書かれてありました。

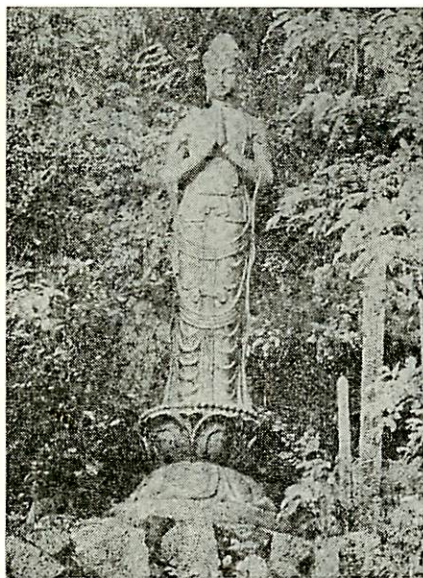
伊豆山の興亜観音

熱海市伊豆山の鳴沢山山腹に、昭和十五年建立された、高さ三米位の陶製の興亜観音が安置されてあります。これは松井大将が上海方面の最高指揮官の時、戦死した部下二万三千余柱と中国の戦死者の冥福を祈るため、各激戦地の血に染った土を持ち帰り、その土をもって観音様をつくり建立されたものです。

その右には、興亜観音本堂等があります。殉国の七士が絞首刑にされた時、横浜市営の久保山

火葬場から、そのお骨の一部を苦心惨愴の末、秘密に持ち帰り、この興亜観音の裏山の岩穴に隠して置いてあるのを堂守の方に案内されて拝んだ事がありました。

血土で作られた興亜観音



遺墨の碑

その後、世論も落ちつきましたので、昭和三十四年に興亜観音の右側にお骨を埋め、その上に七尺位の記念碑を建てられました。元総理吉田茂氏の筆による、「七士の碑」が彫られてあります。その碑の裏面に



廣田弘毅
松井石根
東条英機
板垣征四郎
土肥原賢二
木村兵太郎
武藤章



裏面 七士の碑 表面

は、七士が果嶋のブリズン紋首台で二十三年十二月二十三日午前〇時二十十分紋首される直前、その時の教悔師、花山信勝師が紋首台の入口までつき添い伝言を伝え、遺品を預りなご、すべでの世話

をして、手錠をかけられた不自由な手に墨汁をふくませた筆を持たせて、絶筆の七士の署名をされたのが、この碑の裏面に刻まれたのです。

この興亜観音には、昔部下だった人や関係者たちもよく参拝されるそうですが、ときたま、この碑に抱きついて嗚咽おなげされる人があるとのことです。

その後、伊豆山にお住いの松井大将未亡人にお目にかかったことがあります。

花山信勝師の送別会

今は米国に移住しておられる花山信勝師が、一昨年で日本においてになり、再びアメリカにご帰国されるので、盛大な送別会がありました。その席には東条外四氏の未亡人が出席されました。その席で東条大将の未亡人のご挨拶には、私も大変複雑な気持ちで、胸せまるものがありました。

市ヶ谷法廷でのパール判決

連合国代表のインドのパール判事は、断罪は無謀であるという老大な反対判決書を書かれたとのことですが、是は、日本とは宗教的關係が深く、またインド人全部の根強い信仰心の表われであると思えます。獄中

の七戦犯も、これを読んで多大の敬意を表わして死んで行かれたとのことです。

敗戦の悲しさで連合国側の都合の悪い証拠は全部採用されないという一方的の判定にて正邪は問題にされなかつたのです。併し、皇軍が比島やタイ、その他で捕虜虐待や残虐行為がおびただしいという証拠が沢山現われたことは戦争にはつきもの乍ら残念なことです。

松井閣下の辞世

あめつち
天地も人もうらみず一筋に

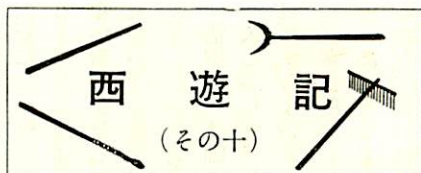
無畏を念いて安らげくゆく
人の世に残さばやと思う言の葉は

自他平等に誠の心

この二首や敵味方の英霊を祭られた興亜観音建立の偉業から見ましても、松井閣下は残虐行為を命ずるような軍人ではない古武土的な血も涙もある立派なお方であるので絞首刑にされたのがお気の毒であるという以外に言葉を知りません。どうか皆さま、鳥居観音にお越しの折りは、仁王門前に建てられておられる。この松井大将書の記念碑にお心を止めてご覧下さい。

そして、当時を追懐すると同時に将来の日本の発展を祈念して頂きたいと存じます。

合掌



すると、いきなりとらがとびだして、ゆくてをふさいだ、もどろうとするとうしろには大蛇が赤い舌をべろべろさせていまにもとびかろうとしているので、法師ののった白馬はおどろいて、一声いなくと、それつきり、前へすすもうともしない。

法師も、これには困りきっていると、その時、山の草をおしわけて、一人の大男がとびだしてきて、とらと大蛇をおいはらってから、

「ごあんしんさいもうだいじょうぶです」と法師のそばへよってきた。

「あなたがとうどうしていいかと、こまっていたところですよ。してあなたはどなたですか」

「わたしはただのりょうしですが、けものや大蛇にはなれているので、どうやらおいはらうことができました。あなたはたいへんおつかれようですが、わたしの小屋へきて、しばらくおやすみになってはいかがですか」

しんせつなりょうしは、馬のたずなをとり、法師を自分の家へつれていってごちそうをしたうえ、二晩も

とめてくれた。おかげで法師のつかれはとれ、元気なからだになることができた。

三日めにはりょうしにあんないされて、また山道があるいていくと、どこからか、ふしぎな声きこえてきた。

「法師さま、法師さま、ここですよ。おまちしておりましたよう……」

法師は、ぎょつとして、足をとめた。

「あの声は……わたしをよんでいるのではないか」

「はあ、あれは、山のおくの石の箱にとじこめられている、孫悟空というさるの声です。五百年も昔のころへとじこめられたといううわざです」

「そうであったか。しかし、かわいそうなことだ。いってくわしくわけをきいてみよう」

法師は、りょうしのあんないで、声のしたほうへすすんで行った。すると……

「法師さま、あなたは天じくへ経文をとりにおいでになるのではありませんか」と、石の箱の中の悟空は、法師の顔をじっとみあげていたのであった。

「もしそうしたら、わたくしを、ここからだしてください。わたくしをここへとじこめたお釈迦さまが、

そうおっしゃったのです。観音さまも、おなじようにおっしゃいました」

「お釈迦さまのおことばというのなら、助けてやりたいが、わたしには力がない、この重い石の箱をあけることはできないよ」

「それはわけのないことです。山のとっぺんへおあがりください。お釈迦さまのはった札があるはずです。そのお札をはがしてくださいれば、箱はひとりであいて、そこからわたしは、外へでられます」

「では、やってみよう」

法師は、山の上へのぼっていった……。なるほど、大石に、一枚のお札がはられていた。法師が指をふれると、おふだは、わけもなくはがれた。悟空は、石の箱からとびだした。

「おかげさまで、生きかえったような気がします。どうぞ、わたくしを天にまで、おともさせてください。」

悟空は、法師のよしになった。

— 久しぶりで、からだが自由になった悟空はうれしくてたまらないようである。

三蔵法師をおいてきぼりにしてかけ出したかと思うと、あたまの上の木から、さっとおりてきて、おどかしたり、さかだちをしてあるいたり、むやみにはしや



三蔵法師に助けられた悟空

ぐばかりか、しまいには、りょうしにむかって、自分の仙術や力のじまんをはじめた。

「七十二とおりの仙術を知っているものは、世界中をたずねても、この悟空さまのほかにあるまいよ。如意棒という、ふしぎな武器を持っているぞ。なにがやっけても、おそれる悟空さまではない。こうしているだけでは、うでがむずむずして、こまるくらいだ」

「おまえがそんなによいなら、わたしはもう家へもどるぞ。それでもよいか」

あまりじまんされるので、りょうしはうるさくなつたので、

「ああいいとも、さっさとかえってもらいたいね。おししょうさまはこの悟空がおひきうけした。まかしておいてくれ」

悟空は胸をたたいて、おおいばりである。

「では、法師さまわたしはここからどります。お気をつけてください」

りょうしは、あとのことを悟空にたのんで、山小屋へかえっていった。

「悟空おまえは、ほんとうに仙術をしているのか。力じまんも、うそではあるまいな。しかし、おまえがつよいのはけつこうだが、力にまかせて、むやみなら

んぼうしてはいけないよ。生きもののいのちは、大切にしなければならぬ。そうでないとこれからさきに、こまることとおこると思うのだが……」

法師は心配そうにいうのであった。

「はい、けつしてらんぼうはいたしません。ほんとうです。わるいけどものか、怪物がでておししょうさまにいたずらしたり、旅のじゃまをしたら、それをふせぐだけでございます」

こういって、もういちど悟空が、胸をたたこうとしたときに、道ばたのやぶが、ざわざわとふしぎな音をたてて、中から一びきのとらが、うおーっ……とわめいて、おどりでた。

「おっ、でたか、まっていたぞ」

悟空は、法師をうしろにかばって、耳から如意棒をとりだして、するするとのぼして、てごろの長さにした。

「おししょうさま、とらをやっつけるのは、こんなぐあいにするのです。ごらんください」

と如意棒をあたまの上に、高くふりかぶって、とらをめがけて、とびこんだ。

ぐわっ。へんな音がしたかとみるまに、どさっとたおれたのは、とらであった。

以下次号

救世大観音上棟式

五月九日、待ち望んでいた、上棟式のよろこびの日が来ました。しかも心配していた天気も朝から快ふくに向って、白雲山は前日の雨に洗われて、若葉と、つじは一段と美しく見えました。

かねてから平沼開祖が、三蔵塔の聖地（海拔四八〇米）と相對して、眺望のよい（稱して面白岩）という台地に、救世大観音を建立しようと、その構想は近代的にして、広い視野の中に独創的なものを多くとり入れて、計画、設計、熟慮の末、昭和四十三年七月七日この道の技術には多くの経験をもった、三信工業株式会社の手によって起工式が行なわれ、以来場所柄いろいろの悪条件が生じたが、よくそれを克服されて、この日予定通り上棟式を迎えたのであります。

午前九時頃から、ぞくぞくと各方面からの来賓の方がお越しになったので、白雲山登山道は、混雑して交通整理に、上り下りする車の連絡誘導に、大わらわでした。

三蔵塔前の広場に用意された、受付と、湯茶、そば接待所のあたりは来賓の方々でにぎわっていました。ここから式場まで二百米ばかりの道は歩いていただくことにいたしました。

式場近くの木立にかこまれた台地から、スピーカーを通して、流されている木やりと、観音経が、晴れの上棟式にふさわしく、人々の足どりも、軽く運ばれていました。

やがて山頂から打ち上げた。煙火の号報がどろく頃、御導師としてお迎えした、曹洞宗管長、総持寺貫首岩本勝利猥下と、その随行等十名の僧侶が控所に到着されました。午前十一時、控所から式場まで、五十米程の坂道を名栗梅花流の婦人三十名が、御詠歌（参宝和讃）奉詠先導申し上げ、猥下の班は式場入口の広場一ぱいの来賓の間を静かに上殿されました。

式は大観音が建立の堂（約六十坪）の屋内で、お客様には祭壇を中心にして、左右に分かれ出来るだけ多くの方にお入りいただいたのですが、それでも外の広場にも多数の来賓がおいでになって、内も外も沢山の人でいっぱいでした。

やがて猥下の拈香、法語に始まり、献茶湯から浄道場へと儀式は進められ、全僧が読経唱和のうちに、平

沼開祖夫妻、関係者、来賓等、焼香がなされ、次いで、
狛下御垂示がありました。来賓を代表しての御祝辞は



岩本狛下と祝辞を述べられる安田生命竹村社長

多数の方々から頂戴する予定でしたが、幸い近くにご
参列いただいた、安田生命の竹村社長と、彫刻家
で有名な沢田政広先生におねがいました。

御祝辞が終って、松浦随行長の法話をいただきたい、発
願主の心からの謝辞があり堂内の式は終了しました。

すでに堂前の広場には用意された盃に、お供えした
般若湯をくんで、狛下を中心に祝っていただきました。

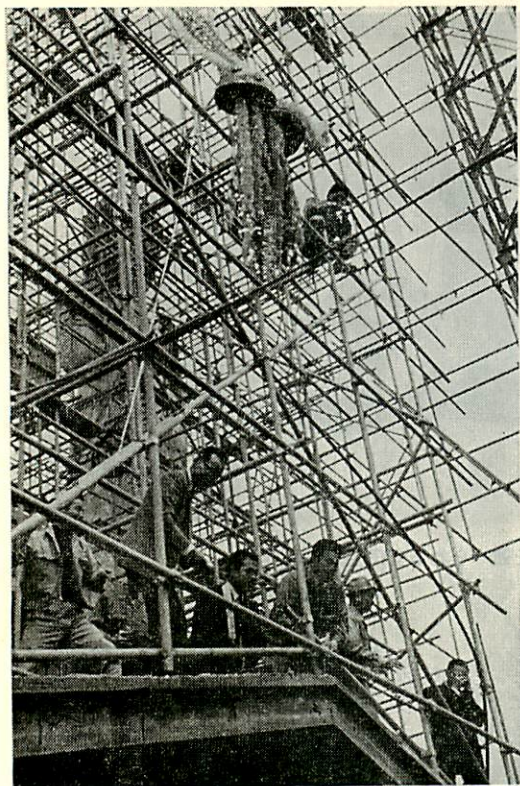
折から堂の屋上やぐらの中央に用意された、薬玉くすたまが
割られて、五色の紙片が舞っているうちに、屋上から
紅白の餅と、紅白のリボンに結ばれた五円（ご縁）玉
が放散されるので、人々は両手を上げて「こっちへ」
「早くまいて」とさけぶ人々で、にぎわいました。

この時山頂から打ち上げた、早打ちの煙火は、つき
つきにとどろき、木魂こゝたまが木魂を生んで、あたかも、初
夏かみなりの雷のようでした。

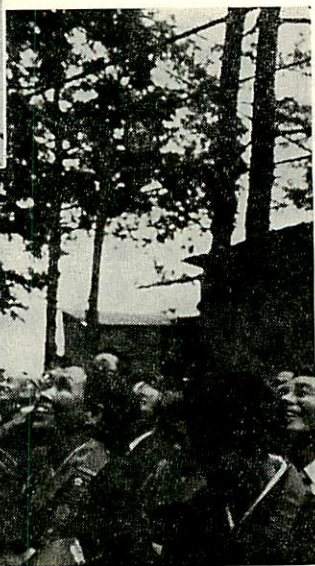
広場から建物を見上げると、高さ十米の基壇の上に
二十米もある巨大な観音の姿が、パイプで組まれた足
場をすいて、空に浮かんで見えました。しばらく見上
げていると、首がいたくなる程でした。

外の行事が終了して、狛下は御詠歌の先導で退場さ
れると、式場はもとの静けさにもどりました。

お中食は、山頂のこと故、三蔵塔前の広場に、用意



した、テントの中や、ベンチで、召し上がっていただ
くように考えたのですが、なれぬため失礼しました。
この日来賓として、講中で団参や、知人友人といっ
た、グループのご来山を合せると、五百数十名になり
ました。そのような多くの方々にご縁があった上棟式
から、来るべき四十六年秋の落慶式へ結ばれて行きま
すように、これら四方有縁の方々に対し心から、一層
のご支援賜りますようお願いする次第であります。



屋上からまかれる供銭供餅を待っている人達



壹万體佛奉安者芳名録



ご奉安御申し込みにより、順次掲載いたします。
甚だ恐縮ですが敬称を省略させていただきます。
○印はA

三鷹市	港區	練馬區	中野區	世田谷區	杉並區	立川市	西多摩	渋谷區	武蔵野市	板橋區	町田	久留米	杉並區	目黒區	小平市	小金井	〃	〃	目黒區	住所
原藤	新妻	久松	酒井	小佐野	中谷	高木	小作	山本	中田	南波	柳田	大矢	雨山	田中	星野	若林	若林	若林	芳名	
春雄	治郎	潜一	杏之助	賢治	健次	恒義	賢助	福平	寿	静治	正夫	守蔵	雄児	謙治	享昭	とく	五郎	五郎	住所	
目黒區	文京區	世田谷	江戸川	豊島區	保谷市	江東區	八王子	西多摩	北多摩	中野區	港區	練馬區	国分寺	青梅市	調布市	東村山	大田區	大田區	住所	
大熊	高橋	木村	牟田口	桜井	三内	橋本	山崎	吉原	豊島	赤羽	城水	齊藤	汐川	奥泉	野村	平野	堀田	堀田	芳名	
明	英次郎	信	長敬	薰	暁	秋子	節夫	泰三	慶郎	暁	芳次郎	三太郎	尚	福治	宏	功	勇	勇	住所	
〃	〃	練馬區	中野區	南多摩	港區	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	世田谷	板橋區	武蔵野	練馬區	新宿區	住所	
塩尻	鎌田	竹内	瀬尾	伊藤	日永	石沢	大沼	井伊	最上	本橋	栗原	平沼	山崎	長田	内田	井野	高山	高山	芳名	
進一	守夫	敏夫	勝也	正雄	清	芳次郎	政吉	兼美	弘之	義雄	通任	浄	完	正光	桂一郎	雅史	正儀	正儀	住所	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	浦和市	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	高橋	住所
奈美	幹	秀夫	ヤス	藤沢	栗原	高麗	倉賀野	諸岡	平沼	関	関口	伊地知	伊地知	栗原	西村	岩田	守次	守次	芳名	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
高野	吉岡	岸本	後藤	見富	金子	北原	石井	本沢	島田	関口	今井	井原	朽津	山本	田島	木村	中上	中上	芳名	
貞夫	恒男	莊太郎	光夫	貢	喜久寿	庄三	義晴	キヨ	森雄	新一郎	正蔵	隆一	寿彦	博男	一夫	栄一	誠一	誠一	住所	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	世田谷	
津村	作島	郡司	窪田	小沢	加藤	河辺	野村	矢野	上野	亀田	馬場	長井	江崎	石原	島野	石毛	銀一	銀一	芳名	
幸代	敏夫	みち	隆二	隆一	寿男	雄蔵	善太郎	秀徳	貞亮	源次郎	千代香	肇	百合子	元典	玉枝	光弥	光弥	光弥	住所	

住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名
秩父市	新井周一郎	大宮市	坂詰 八郎	入間市	山岸 トリ
〃	新井 進	〃	三須重五郎	〃	平岡 くに
〃	小池 清	〃	柳 愛子	〃	〃
〃	小池 八郎	〃	忽滑谷常三	〃	〃
〃	岡 幸八	〃	室田 由雄	〃	繁田基三郎
〃	横川 三郎	〃	齊藤 善政	〃	小沢 信夫
〃	山本 鶴雄	〃	平沼 康彦	〃	小沢 勲
〃	依田和一郎	〃	大野祐一郎	〃	栗原 政次
〃	松本忠太郎	〃	会川 達雄	〃	原 次郎
〃	宮前金三郎	〃	河野 智彦	〃	山崎 正雄
〃	強谷 睦	〃	岡田 春人	〃	青木 良輔
〃	矢尾商店	〃	塩入 花子	〃	宮崎 昇
〃	井上喜一郎	〃	高野 伸二	〃	黒田 義治
〃	豊泉 繁一	〃	原田 愛助	〃	黒田みよ志
〃	北堀 貞雄	〃	西尾右三郎	〃	岩田 清
〃	富田 孝	〃	糟谷 尚彦	〃	細田 修三
〃	宮前 進	〃	石井 春吉	〃	清水 雄平
〃	小島 昭市	〃	染谷 二三	〃	白井 一夫
〃	長谷川巳之吉	〃	鈴木 徹治	〃	須田 いね
〃	嶋崎 義孝	〃	粕谷要三郎	〃	水上 清
〃	村田 道三	〃	菊地 雄梅	〃	高橋 謙吉
〃	齊藤 喜助	〃	平岩 げん	〃	宿谷 義友
〃	〃	〃	北本町	〃	中村 勝
〃	〃	〃	〃	〃	〃

住所	芳名	住所	芳名	住所	芳名
川口市	道野 昭寿	東松山	元田 本助	飯能市	清水 利男
〃	老川 栄一	北九州	上野 淑亮	〃	真柄 勇
〃	増田 金藏	〃	浅見 富藏	〃	梶谷 真一
〃	桶川町 馬橋 利雄	〃	岡部 博吉	〃	内田 政治
〃	越ヶ谷 清水萬亀夫	〃	枝久保鶴四郎	〃	小島 政治
〃	鴻巣市 佐藤 武一	〃	岡部 元治	〃	小島 武夫
〃	〃 林 泰一郎	〃	石井 晟助	〃	小島 武夫
〃	〃 岡野 修	〃	石井 健之	〃	落合 隆二
〃	〃 田口千代乃	〃	岡部 千三	〃	問庭 正二
〃	蓮田町 大島 齊礼	〃	石井新三郎	〃	黒田 明
〃	所沢市 成田 榮造	〃	佐野 忠雄	〃	望月 盛隆
〃	別府 大久保 孝	〃	佐野 正春	〃	工藤 勝彦
〃	〃 大久保信恵	〃	浅見 倫一郎	〃	渡辺 尚宣
〃	〃 荒谷 森見	〃	浅見 清	〃	横溝喜久雄
〃	横浜市 宮田 留吉	〃	町田光一郎	〃	吉池 智
〃	川崎市 齊藤 昌久	〃	平沼寛一郎	〃	齊藤 陽
〃	島根 堀越 一郎	〃	田島 伝治	〃	金子 行男
〃	羽生市 西城 武雄	〃	中村 武雄	〃	常見 武男
〃	上尾市 富田 民治	〃	山川 邦雄	〃	小菅山 博
〃	本庄市 山崎重兵衛	〃	浅見 一雄	〃	川野 博道
〃	大和町 保坂 辰男	〃	野口 元可	〃	吉山喜久夫
〃	深谷市 木村繁次郎	〃	平 孝男	〃	安田 正吉
〃	行田市	〃	真野 信治	〃	真野 信治

府中市	中野区	江戸川	中野区	中野区	千代田	入間市	大宮市	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	浦和市	〃	〃	大宮市	住所	
遠藤隆徳	尾山晃也	芦沢敦子	大竹龍造	渡利弘通	川岸一平	小島政一	大崎桂三	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	国谷正一	島崎実	金子泰造	日坂安久	大野修三郎	住所
小平市	世田谷	台東区	立川市	板橋区	中央区	豊島区	練馬区	板橋区	北区	文京区	杉並区	中野区	小平市	高橋守次	新井一郎	小久保英夫	石塚孟	田島大三	福島みつ子	〃	住所
腰塚茂	岩井良太	吉田茂	富沢博吉	杉田牧	丸山マチ子	柿原安一	夏目敏夫	池田せつ	大見巻二	岡野正博	村上俊男	酒巻輝	河原英二	武石千代	武石千代	宮本ま	武石武夫	村田雅彦	有賀喜美子	酒井杏之助	住所
〃	〃	中野区	板橋区	北区	八王子	江戸川	新宿区	〃	練馬区	港区	〃	北区	江戸川	中野区	品川区	大田区	杉並区	豊島区	〃	練馬区	住所
洪沢亨	亀倉恒雄	佐藤五郎	杉浦武	森谷吾朗	桑原忠	関内君男	福田丈二	大島周作	小沢辰雄	鈴木芳雄	塚田憲一	新津港	岡本忠	青木達雄	中山誠一	大沼康男	菊地虎雄	黒川倉好	石原嘉一郎	中根佐一郎	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	住所
〃	〃	〃	〃																		

壹万體観音尊像御奉納の勧進

鳥居観音

東京事務所
平沼宅

入間郡名栗村
電 名栗二七五
練馬区小竹町一ノ五二
電 九五五〇四六五

切.....り.....と.....り.....線.....

建立中の大観音の体内及堂宇内、壁面に、壹万体の観音像奉安をおねがい申し上げたところ、有縁の方々からすでに五百余体のお申し込みに預りました。定めし壹万の方々のご祖霊も、救世大観音の偉大な功德のお力に守られ極楽の喜びをお受けなさることと存じます。何卒この浄業が達成するようにご勧進申し上げます。

壹万體観音尊像申し込み用紙

区分	A B	供養靈位（何々家祖先代々又は御戒名）	御住所	御芳名	号数	取扱者

永代供養料

観音像 A（三三三）五千元 B（二五・五）三千元
御払込次第御仏壇用小観音（一八・八）を御送り申し上げます。

御振込先

埼玉銀行名栗支店 又は 埼玉銀行練馬支店

御申込書送り先

鳥居観音 又は 東京事務所 又は 右埼玉銀行支店

春の行事



春も彼岸となると、気温もゆるみ、朝夕の生活もたのしくなります。花によせて内外からの行事が、次のように執行されました。

○三月二十二日、午後一時から、例によって本堂で、彼岸法要を執行したのち、参列していただいた、地元のご老人、子供さん達が、本堂の中央に円座をつくり、大きな珠数をくりながら、まん中でお導師のたたく鉦にあわせて百万遍のお念仏をとなえ終って庫裡にて茶話会に彼岸の一日をたのしまれました。

静かな浅春のひろさがり、境内の石垣の沈丁花の香がほのかにただよっていました。

来山なさったお客様がこの香りをめでながら、静かな環境でいいところだなァ……といひ合っておられました。

○四月十七日、春季例大祭、珍らしい花日和に恵まれて、午前十時から本堂において法要が執行されました。地元の梅花流の婦人会員によって、御詠歌の奉詠があり、次いで、鯨井、平野両師の献香、三拝、読経法語、読経、焼香と進行されました。

かねて、ご案内申し上げた、多数のお客様のご参列によって、一段と光彩をそえていただきましたので、七観音の慈顔は一そうかがやいて拝されました。

この日深く感激いたしましたことは、参拝くださった方々の多くが、観音経をよくご存じで、教本をお手に、すらすらと、となえていらっしやったことでした。

午後一時から三蔵塔の内庭で、釈迦、三蔵法師の法要をいとなみました。

平野老師の読経のうちに、参列の方々による献香がなされ、塔前の大きな香爐に沢山の香束が立てられて、その煙りは陽炎のように、春の陽にとけて、中空にうすれて行きました。

法要が終ると、塔をバックに一同記念写真が撮影されましたが、多くの方々が、山内の自然を眺めたいとおっしゃって、遊歩道を氣にまかせて、探勝なさいました。

山の尾に沿うて三つ葉つじの花が、歩道近く手にふれるように咲き初め、山麓の梅も咲き残り山ざくらは花盛り、山吹きもみどりの蕾の中から黄をのぞかせたりして、梅桜桃梨一時に開きあたたかもこの日をまっていたかのような感じがいたしました。

特にこの日、川越の（親友講）講元齊藤新作殿の一

行五十名様が来山されて、下山なさる時、丁度折よく平沼開祖も同道されて、いろいろと説明やら案内をなさったので、この聖地に心うたれ、山の春の美しくさに何も忘れていらっしやったようでした。

○四月二十一日、東京の山田勝康様が会長で、観音会という会がつくられてから、各地の観音様を参拝されて、丁度本年は十周年を迎えたので、その式を当山の本堂に於て挙げたいということで、来山されました。

東京から二台の観光バスに分乗して、午前十時半にはお着きになり、庫裡で休む間もなく、本堂に百十七名の方々がぎっしりと着席されました。

有馬老師の読経（観音経）に合わせて、一同唱えられました。次いで山田会長から十周年のごあいさつ、役員へ、記念品贈呈、謝辞が述べられました。

そして、今後役員として、国府方金佳様のご紹介があつて、今後のご活躍をお願いされて、式は閉じられ一行はセンターにお入りになりました。

センターで中食をとられた後、三三、五五、つれ立って白雲山の新緑の中へ、登って行かれました。

この間、国府方様は、庫裡にお入りになって、長机の上に、するすると丈余の巻紙をお開きになりました。拝見すると、百余の霊位、住所、施主名がしたため

られていて、その追加をかきこむのだと、用意してこられた筆であざやかにしたためられました。

その霊位は百三十八名になりました。

それを本堂にお供えになり、ご自分で観音経全部を読経されて、お祈りになりました。

当山ではそれをいただいて、法要をいたしております。

山田様、国府方様の如き観音信者の方が、多く来山されるようになりましたことは、当山にとって実にありがたいことです。

山からもどられた方々は久しぶりに山の風景と、きれいな空気にふれて、信仰を通じてたのしかったと、よろこんでおられました。そしてお帰りのバスの中から手をふっていられました。

○四月二十四日、横浜高島屋友の会九十名来山。

この来山は、本堂七観音と、文庫と、三蔵塔と、山の自然を味わうという内容で、ここにおつきになったのは午後一時頃でした。もっとも飯能で、天覧山にのぼって、食事をされてから来られたのだそうです。

ですから時間がないというので、すぐ本堂参拝、文庫見学、それから山へ行かれて、三時頃一同下山されるやすぐバスに分乗してお帰りになりました。

横浜を八時に出発して来られても少ない時間で、当山の施設のいろいろをごらんになったのにはおどろきました。

○四月二十九日(祭日)東京福徴講(講元新妻治郎氏)の一行が、当山におつきになったのは十時三十分。

飯能から四台のタクシーと、東京から自家用車一台に分乗されて、二十五名様が来山されました。

すぐ本堂で平野老師の観音経について、家内安全、交通安全、当病平癒の祈禱があつて、一同焼香、終つて七観音をしみじみごらんになりました。

春の光が、くまなくさし込んだ本堂の七観音は、一そう美しく拝されました。中食はセンターから箱弁をとつて、庫裡で召し上がりました。

一行のどなた様も、外の景色を眺めながら、

「静かだねえ」「あら驚がないているわ」「私達観音参りをする日に降られたことがないわねえ」などと語り合いながらの一時はたのしそうでした。

中食が終ると、新妻さんは来る途中、永田で有名な大里屋の四里もちを買つて来られて、お一人に二個ずつと、東京からおもちになった折詰、おすし? ジュース等を手際よくおわけになって、さあ……、おやつをもつて……、これからお山へのぼりましよう」と、先

頭をきつて行かれました。

丁度新緑の中のつつじ、山桜、つばき、山吹が咲きそろつていたので、東京からの方達だけに、珍らしうに一歩一歩のぼつて行かれました。

午後四時無事に下山されて、庫裡での狭山茶の味は格別とよろこばれました。

そこへ迎えの車がきたので、皆さま口々に、又来ますよといひながらお帰りになりました。

七月～九月 行事

○七月十七日 月例法要 本堂 午前十時より

○八月十六日 月例法要、流灯法要、煙火大会及盆踊り大会

○九月十七日 月例法要 本堂 午前十時より

○九月二十三日 秋彼岸法要、物故者法要 本堂 午後一時より

鳥居観音のしおり 第十五号

発行日 昭和四十五年七月一日 每号定価貳拾円

編集兼 発行人 埼玉県入間郡名栗村鳥居観音 岡部千三

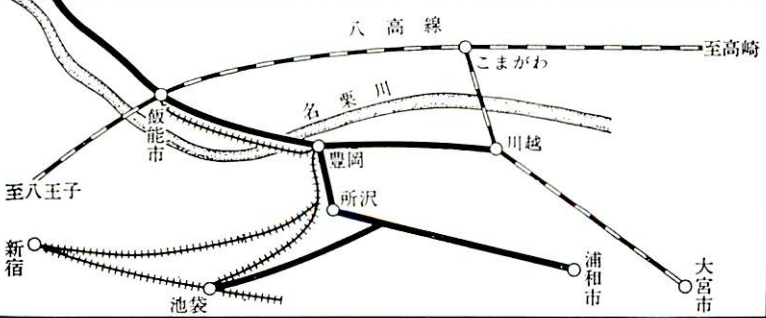
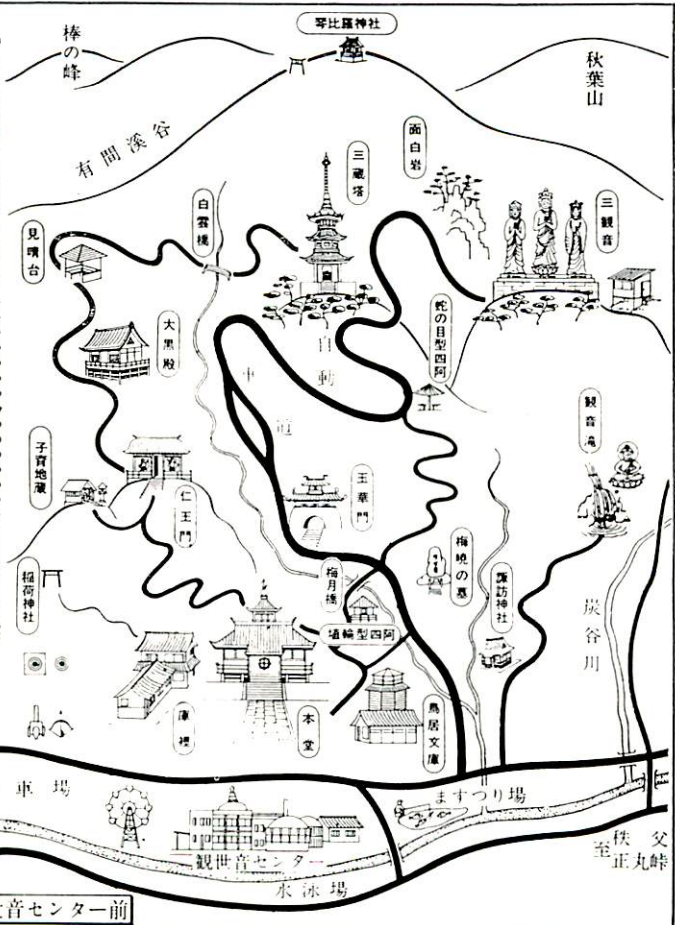
印刷所 浦和市仲町二一八一五 武州印刷株式会社

発行所 鳥居観音 電話〇四二九七〇四(二七五番)

(五番)

白雲山

鳥居観音
観世音センター案内図



灯籠流しと煙花大会

お盆に当る八月十六日には、奉納者の祖先の御霊を記入した灯籠を鳥居観音の本堂に於いて供養の上、夕暗せまる頃、読経とご詠歌に和して、名栗川の清流に千余の灯籠が波にゆられて、その明りは水にうつり、実に幽玄で、皆さまの祖先の霊も定めしご満足と思ひます。

折柄しかけ花火が川をはさんで色々と乱舞しました数百発の打上げ花火は連山にこだまして実に壯観です。

尚名栗川畔の盛大な盆踊りも見物です。

何卒皆さまには避暑傍々ご来遊下さい。

灯籠の申込み御願ひ

ご先祖の御霊をお慰めにご参加下さい

灯籠奉納代 1灯 金三百円

払込場所 埼玉銀行名栗支店または鳥居観音

申込先 鳥居観音寺務局

名栗川のプール

名栗川を関止めて作った広くて安全な天然プールで遊ぶ子らのにぎわい、また日暮れて川のせ、らぎにカジカの声をきくのも、えも云われぬ風ぜいです。

お宿泊の観世音センターには舞台もございます。

飯能から名栗までの道路も良くなりました。是非お出掛け下さい。